

芭蕉の月の句——西行との比較において——

竹 島 智 子

一、両者の共通性

西行の『山家集』を四季別に見ると（日本古典文学大系本による）、春一七三首、夏八〇首、秋二三七首、冬八七首で、秋の歌が最も多い。秋の歌の内、月をよみこんだ歌は、一一六首で、秋歌全体の約半数をしめている。

芭蕉の発句を見ると（日本古典文学大系本による）、春一七九句、夏二〇四句、秋二五五句、冬一七二句で、秋の句が最も多い（なお、句数は、諸本により異同があり、『芭蕉大成』では、春二二〇句、夏二三六句、秋三〇六句、冬一九九句となっているが、秋の句が最も多いことは確かである）。秋の句の内、月をよんだ句は、六二句で最も多く、秋句全体の約四分の一をしめている。芭蕉は、西行ほどには月をよんでいないが、「月はまつほどもなくさしいで、湖上花やかにてらす。」（堅田十六夜之弁）には、芭蕉の心おど

りが感じられる。また、素堂が、

我友芭蕉の翁、月にふけりていつとはわかぬ物から、ことに秋を待たたりて他の求めなし。（『芭蕉庵三日月日記』）

と述べているように、月に対する情熱がうかがわれる。

かくて、西行と芭蕉とは、秋の月に強くひかれて最も多くよんだ。両者は、内向性と自在性とを兼備した詩人であって（『檀蔭国文学』第七号所収「西行と芭蕉」参照）、澄んだ輝きを持つ神秘的な秋の月に、真摯にとりくみ、自由に思索して、深い诗情のある作品とした。また、月に、人間思慕の心も托している（重複を避け、詳細は、次項の相違性と関連して述べたい）。

二、両者の相違性

西行と芭蕉の月の詩を、それぞれ当代の他の詩と比較しつつ、相違性について考察したい。

西行の月の歌では、

いかばかり嬉しからまし秋の夜の月すむ空に雲なかりせば
ゆくゑなく月に心のすみ／＼て果はいかにかならむとすらむ
ながむればいなや心の苦しきにいたくな澄みそ秋の夜の月

など、「澄む」ということばが、多く用いられ、その類似語である
「清し」も用いられている。あるいは、それらのことばが直接見え
なくとも、一首全体、月の澄明な情景を描き出して、月をあこがれ
ている。

西行周辺の代表的な月の歌を、『新古今集』（日本古典文学大系
本による）から見ると、

うき身には詠むるかひもなかりけり心にくもる秋の夜の月

慈円

ことばりの秋にはあへぬ涙哉月のかつらもかはるばかりに

皇太后宮大夫俊成女

などといった感傷的な歌や、

秋の色はまがきにうとく成りゆけど手枕なるるねやの月かけ

式子内親王

今宵誰す吹く風を身にしめて吉野の嶽の月をみるらん

従三位頼政

たのめたる人はなけれど秋の夜は月みてぬべき心地こそせね

和泉式部

などの写実的な歌、さらに、

松島や潮くむあまの秋の袖月は物思ふならひのみかは

といった理くつっぽい歌、

さむしろや待つ夜の秋の風ふけて月をかたしくうちのはしひめ

定家朝臣

の抽象的な歌などがある。それぞれ特色があって、個性的ではある
が、西行ほどに、内ふかく浸透させつつ、さらりとした澄明な味わ
いの歌は見られない。そのことは、当代歌人中でも、西行の澄明な
味わいは、独自のものであったと言えよう。

芭蕉の月の句には、「澄む」ということばをよみこんだものはな
く、「清し」をよみこんだものは、

元禄二年つるがの湊に月を見て、氣比の明神に詣、上人の

古例をきく

月清し遊行のもてる砂の上

の一句である。この句は、芭蕉の月の句の内、最も美しい秀作だと
思う。場所こそちがえ、この句と似通った味わいの西行の歌に、

名所月

清見瀉沖の岩こそ白浪にひかりをかはず秋の夜の月

がある。ともに、体言止めで、余情深い。芭蕉の句では、「清し」
と、直截に述べている。さらに、中七、下五に、歴史の重厚味が月
光に照らされてきわだち、白砂のこぼれるような美しさが浮かびあ
がって、絵画的である。西行の歌では、文学ジャンルの相違から、
「清見瀉」「白浪」「ひかりをかはず」という美辞をつらねて、月
光の清らかさを表現した。そして、場所設定が、上の句から次第に

鴨 長明

細部にわたり、第二、三句目は音楽的で、第四句目が上三句と結句をつなぐ働きをし、結句は色彩的に美しく澄んだ月をすえた。一首全体、音楽性と絵画性とは融合している。つまり、西行の歌は、より音楽的、間接的で、柔軟であり、芭蕉の句は、より絵画的、直接的で、重厚であると言えよう。

芭蕉周辺の代表的な月の句を、『近世俳句俳文集』（日本古典文学大系本による）より見ると、

皆人のひる寝のたねや秋の月

松永貞徳

月影をくみこぼしけり手水鉢

野々口立圍

松にすめ月も三五夜中納言

安原貞室

鯛は花は見ぬ里も有けふの月

井原西鶴

山寺に米つくほどの月見哉

越智越人

など、滑稽味はあるが、深みに乏しい句や、

名月よ今宵生るる子もあらん

伊藤信徳

此秋は膝に子のない月見哉

上島鬼貫

など、しみじみとしているが、平凡な句であった。彼らには、芭蕉のような深みに乏しく、当代俳人中、芭蕉の重厚味が注目される。

また、芭蕉には、

月はやし梢は雨をしながら

のような速度感のある句もあるが、西行の歌には速度感はなく、

なか／＼に時々雲のかかるこそ月をもてなすかざり成けり

といった、ゆったりとした味わいを持ち、流麗である。さらに、西行の代表的な歌、

こころなき身にもあはれは知られけり鳴たつ沢の秋の夕暮
は、寂しきの流露した「あはれ」をとらえた。一方、季節は異なるが、『冬の日』に見える、

田家眺望

霜月や鶴のイタならびるて

荷兮

の付句、

冬の朝日のあはれなりけり

芭蕉

は、冬ざれのきびしさが鋭く浮かびあがる「あはれ」をとらえて、彫刻的である。芭蕉の句は、より鋭敏で、西行の歌は、より流麗であると言えよう。

動乱の世をそむいて出家した西行は、

諸共にかげをならぶる人もあれや月の洩りくる笹の庵に

とよんで、人なつっこいが、草庵にいて友を待つ受身の姿勢が感じられる。

慕はるる心やゆくと山の端にしばしな入りそ秋の夜の月

という西行の歌も、受身的であると言えよう。これは、精神面の充実をはかるために、外面的には、現実社会から逃避した西行らしい姿勢であると思われる。西行は、清らかな自然を友とし、心寄りそう親友の訪れを待っていたのであろう。芭蕉も、人なつっこいが、

於天津義仲庵

三井寺の門たたかばやけふの月

とよんで、自ら出て行こうとする点、能動的である。
名月や池をめぐりて夜もすがら

という芭蕉の句も動的で、活気ある元禄時代を反映していると思
う。

一方、前掲の西行の歌「ゆくゑなく月に心のすみ／＼て果はいか
にかならむとすらむ」といった、浮かれるような憧憬も、「ながむ
ればいなや心の苦しきにいたくな澄みそ秋の夜の月」と、月に懇願
するような姿勢も、芭蕉の句には見られない。芭蕉は、

鎖あけて月さし入よ浮み堂
と、月光を愛で、あるいは、

其柳亭

秋もはやばらつく雨に月の形
と言って、月の細い形に、晩秋の寂しさを微妙に感じとったりして
も、西行ほどにそこが、かつ苦しんだ様子は見えない。そのこと
は、西行は、より主観的で、芭蕉は、より客観的であったと言えよ
う。

以上、西行の歌は、より主観的、受身的、音楽的で、柔軟、澄明
であり、浮かれるような憧憬が感じられる。一方、芭蕉の句は、よ
り客観的、能動的、絵面的で、鋭敏、重厚である。当代の他の詩
や、両者の文学ジャンルの相違を考へても、西行の、浮かれるよう
な憧憬と澄明な味わい、芭蕉の、能動的な姿勢と重厚な味わいと
は、独自のものであったと思う。

三、芭蕉の攝取法

芭蕉が月をよんだ句数を、日本古典文学大系本によってしるす

と、寛文年間一句、延宝年間三句、天和年間二句、貞享年間十句、
元禄年間四十五句、年次不詳二句となり、合計六十三句である。そ
の句数の最も多かった年は、元禄二年で、十三句見え、次いで、元
禄四年九句、元禄元年七句となり、他は五句以下であった。元禄元
年及び二年を加えると、二十句となり、月をよんだ全句数の約三分
の一をしめる。もっとも、こうした句数は、諸本により多少異なる
が、元禄初年に月の句を最も多くよんだことは、確かである。作品
の質も、初期の言語遊戯的段階を脱して、次第に、思念の深さと詩
情の豊かさが見られた。多田裕計氏は、「月を求めゆく芭蕉」と
して、

①「鹿島の月」(四十四歳)——月を追い求める捨身風狂の時
代

②「更科の月」(四十五歳)——月に証せられる心のゆとりと
自然随順の時代

③「敦賀の月」(四十六歳)——月にあらず己れにあらず、月
光と自己とが融合交流する、不易流行精神の開眼時代

の三つを焦点とされた『芭蕉その生活と美学』一〇七ページ参
照)。つまり、貞享四年、元禄元年、元禄二年をピークとするもの
で、月の句数の多い時期とも一致している。また、芭蕉が、花の句
を最も多くよんだ年を見ると、元禄元年で、十六句に及び、次いで
元禄三年の七句、他は五句以下であった(日本古典文学大系本によ
る)。かくて、元禄初年は、詩精神の高揚した時期であったことが
わかる。

次に、西行の影響を受けたと見られる芭蕉の月の句を見たい。

暮て外宮に詣待りけるに、一ノ華表とらふの陰ほのぐらく御燈処々に見えて、また上もなき峯の松風身にしむ計はかり、ふかき心を起して

みそか月なし千とせの杉を抱くあらし（貞享元年作）

の前書は、西行の歌「深く入りて神路の奥を尋ぬれば又うへもなき峯の松風」によった。芭蕉は、西行の歌をふまえて、月のない闇の大景をとらえ、厳肅な気分を深めた点、創造力を思わせる。また、

雲折／＼人をやすむる月見哉（貞享二年作）

は、西行の歌「なかく／＼に時々雲のかかること月をもてなすかざりなりけり」をふまえて、一句全体、直截に表現して、俳諧文学とした。

柴のいほときげばいやしきなれどもよにこのもしきものにぞ有ける

このうたは東山に住ける僧をたづねて西行上人のよませ給ふよし、山家集にのせられたり。いかなるあるじにやとこのもしくて、ある草庵の坊につかはしける

しばのとの月やそのままあみだ坊（年次不詳）

は、西行の

いにしへ比、東山に阿弥陀房と申しける上人の庵室にまかりて見けるに、何となくあはれにおぼえて詠める

柴の庵と聞くはやくしき名なれどもよにこのもしき住居なりけり

にもとづいて、柴の庵に住む主の清月のごとき心境をよんだ。ここにも、芭蕉の内ふかく西行が任んでいたことを思わせる。しかも、西行の歌をふまえつつ、柴の扉にさす月をよんだところが、芭蕉の創造である。

さらに、

野の駒、ところえがほにむれありく、またあはれなり。（中略）

寺にねて誠がほなる月見哉（貞享四年作『鹿島紀行』）

から思いついて、芭蕉作品に見える「何々顔」を調べてみると、他に、

山吹の露菜の花のかこち顔なるや（天和元年作）

菜畑に花見顔なる雀かな（貞享二年作）

四条の川原すずみとて夕月夜のころより有明過る比まで、川

中に床をならべて夜すがらさけのみものくひあそぶ。をんな

は帯のむすびめいかめしく、おとこは羽織ながう着なして、

法師老人ともに交、桶やかちやのてしこまで、いとまえがほ

にうたひののしる。さすがに都のけしきなるべし

川かぜや薄がききたる夕すずみ（元禄三年作）

があった。ところで、蕉風革新派と言われた才麿、鬼貫、言水、信徳、素堂、来山の句にも、「何々顔」という表現は、全く見えない（『元禄名家句集』による）。「何々顔」は、当代俳人中でも、特に芭蕉好みの表現と言えそうである。

そこで、西行等の歌に見える「何々顔」と比較したい。「何々顔」は、西行好みの表現であつたらしく、古典和歌でも、『山家

集』に最も多く見え、十四首である（日本古典文学大系番号4・143・167・181・186・284・288・379・455・625・628・640・680・1018）。芭蕉の用いた「かこち顔」は、『山家集』628「なげけとて月やは物を思はするかこち顔なるわが涙かな」の他、『風雅集』や『続後拾遺集』に見え、「花見顔」は、『山家集』640の「よもすがら月を見顔にもてなして心の闇にまよふ比かな」の「月を見顔に」と類似発想である。「誠がほ」は、『山家集』になく、『風雅集』に見える。

ところで、「ところえがほ」や「いとまえがほ」は、他の文献（『国歌大観』『雅言集覧』や、日本古典文学大系・索引等）に見えない。しかし、芭蕉が、「いとまえがほ」と述べた頃（軽みを志向した頃でもあり、軽みは、西行にもとづくと思われる谷山茂氏の説（大阪市立大学『人文研究』第三巻第八号）を想起したい）、

愚眼故能人見付ざる悲しさニ、二たび西上人をおもひかへしたる迄ニ御座候。（元禄三年四月十日付 千川宛書簡）

としるし、西行からの深い影響を再認識している。そのことを思いあわせると、「いとまえがほ」は、『山家集』379の「こよひはと心得顔に澄む月のひかりもてなす菊の白露」や625の「月をみる心の節を咎にしてたより得がほにぬるる袖哉」等といった西行の表現にヒントを得て、芭蕉が造語したのではなからうか。

つまり、芭蕉俳諧を通じて、天和元年（芭蕉三十八歳）は、新風への動きが見え、句境の深まりを示す年として注目されるが、ちょうどその年に、自ら、西行好みの「何々顔」をそのまま取り入れた（かこち顔）。次いで、貞享二年（芭蕉四十二歳）には、西行の

表現を学びつつ、そのままの形では摂取しなかった点に、一段の進歩を見せている（花見顔）。貞享四年には、『山家集』以外の歌集からとって、西行にとられない境地を開いた（誠がほ）。「ところえがほ」は、芭蕉が他に学んで、造語したものであろう。前述のごとく、元禄三年（芭蕉四十七歳）には、「何々顔」においても、西行へと回帰しつつ造語したと考えるのが自然であろう（いとまえがほ）。その前年である元禄二年が、西行五百歳忌で、奥の細道の旅も、西行によることが多いことは、周知のとおりである。元禄三年には、さらに拍車をかけて、西行へと傾斜しつつ、新境地を開拓したものと思われる。

以上、芭蕉は、西行から多く学び、元禄初年の詩精神高揚も西行によるところが大きいのであるが、たえず創造をめざしていたことがわかる。